



265

この記事がすごい！ 毎日新聞今週のこだわり4本

2025年6月1日号

編集／毎日新聞社カスタマーリレーション本部



池上彰の

脚本家の大石静さんが語る

大河制作の舞台裏とオリジナルへの思い

6月1日(日)=1、3面



大石静さん=写真=は昨年、NHK大河ドラマ「光る君へ」の脚本を担当しました。オファーを引き受けてから3年半という長丁場の仕事だったそうです。

平安時代を舞台に、紫式部と藤原道長の2人を中心に貴族の恋愛や内裏の権力闘争などを描きました。藤原道長についても、これまでは傲慢な権力者というイメージでしたが、「光る君へ」ではそれが大きく変わったと感じた視聴者もいたと思われます。池上さ

んは「歴史を変えることになりませんか」と斬り込みますが、大石さんによると大河ドラマで歴史ものを描く際、「絶対にやってはいけないこと」があるそうです。一体それは……。

脚本家として長いキャリアを持つ大石さんですが、最近、ドラマの原作に小説や漫画が多いような気がしているそうです。その背景には何があるのでしょうか。脚本家になったいきさつや高校時代の思い出についても語っていただきました。

そこが聞きたい

井上登喜子さんに聞く

日本人とクラシック音楽 6月1日(日)=くらしナビ面

ベートーベンに代表されるドイツ音楽が重宝され、男性社会の時代が長く続いたクラシック界ですが、近年は女性の活躍や演奏曲の多様化など、変化の兆しがみられるといます。戦前から日米欧で演奏された約7万曲

と、指揮者らの属性を調べたお茶の水女子大副学長の音楽社会学者、井上登喜子さん=写真=に、音楽と社会情勢との深い関わりや、新たな価値を求める聴衆にクラシック界がどのように向き合うべきかを聞きました。



論点

「推し活」化する選挙

6月4日(水)

|| オピニオン面

選挙が「推し活」化しているという指摘が、政治学者らから寄せられています。好きなアイドルにファンが熱中するのよう「推し」にして応援

する風潮が有権者の間で広がっているというものです。政治家もそれを意識し、趣味などのプライベートの動画をSNSに投稿するケースが目立ちますが、そこに

危うさを指摘する声もあります。夏に迫る参院選の前に、推し活の選挙の影響力や社会的背景を3人の識者に聞きました。

特集 **ワイド**

どうする日米関係 6月2日(月)=夕刊2面



トランプ米大統領の言動に世界中が混乱する中、社会学者で東京大名誉教授の吉見俊哉さん=写真=は「ナショナリストではなくエゴイスト」と痛烈に批判します。長らく同盟関係を結ぶ両国。日本における米

国の影響などを研究してきた吉見さんは、互いにどんなまなざしを向けてきたのか、歴史の中から浮かぶ関係性を見だしてきました。日米関係はこのままでいいのか、今後どうあるべきなのかについて直言します。

竹橋の窓辺から

編集後記



毎日新聞社は23日、オンラインイベント「『追跡 公安捜査』の舞台裏」を開催します。5月28日には、大川原化工機冤罪(えんざい)事件で東京高裁が改めて違法捜査と認めました。警視庁公安部の実態取材して連載してきた社会部の遠藤浩二記者とジャーナリストの青木理さんが対談します。連載をもとにした書籍付きチケットも。お申し込みはQRコードからどうぞ。(都築葵)

